

ともだちのかたち

横浜市立生麦中学校 1年 佐伯 凛^{さえき りん}

今年の夏、私の心に一人の大切な友達への思いがありました。遠くに引っ越したため毎年夏休みにだけ会えるのですが、今年はコロナの影響でそれも叶わなくなったからです。

今から3年前の夏、友達が引っ越してから待ちに待った夏休み、会えるのが楽しみで仕方なかった私に、母から話がありました。聞くと、その友達が自分で髪の毛を抜いてしまう病気だということでした。その子のお母さんが、凛ちゃんになら何か話してくれるかもしれないと言っていたとのことでした。当時の私は、母たちからそのように言われても、届く手紙の中のその子は、新しい場所での生活がとても楽しそうで何の事なのかよくわかりませんでした。そして一年ぶりに会えた友達は母から聞いていた通り髪の毛が少なく帽子を被っていました。でもそんなこと関係無く私たちは抱き合いました。夢のような時間はあっという間に過ぎ、その間私は友達の髪の毛のことはほとんど忘れていました。最後の夜、たくさん話をしました。私がウトウトしたころ友達が、

「私ね、知らない間に自分の毛を抜いちゃうんだ…。」

と言いました。私は、何と言ったらよいかわからず

「うん…。」

とだけ言いました。その子も

「うん…。」

と言いました。翌日別れる時私は、

「次の夏休みも、また絶対会おうね。」

と約束しました。その後、

「ずっと友達だよ。」

と言いました。そんなこと、当たり前のことなのに言いたくなりました。当時小学生だった私が友達の髪の毛の事について、伝えられる限りの言葉でした。友達は笑いながら泣いていました。翌年の夏、

「凛ちゃん！」

という声に顔を上げると、東京駅の改札の向こうで友達が変わらない優しい笑顔で手を振っていました。私は急

いで駆け寄り抱き合いました。嬉し涙で少し歪んで私の目に映った友達は、眉毛とまつげがなく、つけ毛とターバンをしていました。でもそんな事関係なく、私たちは離れていた時間なんてなかったみたいに仲良く過ごしました。少し前と違ったのはプールに遊びに行った時、

「ちょっと待っていてね。」

と、友達が私の見えない所へ、スイミングキャップを被りに行ったことでした。私はそれを見て、友達が今抱えている病気を理解したいと思いました。調べると、現時点では効果的な薬も治療法もないとありました。私はその友達のために何ができるのかをずっと考えるようになりました。そして、答えが出ぬまま迎えた今年の夏、私が友達に宛てた手紙は楽しいものではありませんでした。私は合唱の伴奏のオーディションに落選し、やり場のない悲しい気持ちをその子にだけ聞いてほしかったからです。すると友達から、私は凛ちゃんのピアノが好きだよ。それでやめたりしないでね。と返事をもらいました。私はドキッとしました。実はそれ以来ピアノから遠ざかっていたからです。そして、友達は音楽が大好きでピアノを習いたいけど習えなくてよく私の家で一緒に弾いていたことを思い出しました。私は今またピアノに向かっています。

友達の病気を意識するようになり、私は自分のほうが友達に何かしてあげなければという思いに偏り過ぎていたように思います。私も元気をもらっていることがたくさんあるのです。助け合う時も友達だし、そこにいてくれるだけでも友達で、友達になれたことが嬉しい。友達にとって私もそうでありたい。

友達と聞いて誰かの心に浮かぶ顔の数だけ友達のかたちがあるのです。私は心から心配してくれた友達に返事を書きます。

「おかげで元気がでたよ。ありがとう。またピアノ一緒に弾こうね。離れていても会えなくても、ずっとずっと友達だよ。」